

白毫寺(びやくごうじ)は、奈良県奈良市白毫寺町にある真言律宗の寺院。本尊は阿弥陀如来。開基(創立者)は勤操と伝える。

山号・高円山 宗派・真言律宗 本尊・阿弥陀如来(重要文化財)

創建年・伝・霊亀元年(715年) 開基・伝・勤操 別称・一切経

関西花の寺二十五霊場18番

奈良市街地の東南部、春日山の南に連なる高円山の山麓にあり、境内から奈良盆地が一望できる景勝地に建つ寺である。関西花の寺二十五霊場第18番(萩)。

なお、寺号の「白毫」は、仏の眉間にある白い巻毛のことである。

#### 歴史

霊亀元年(715年)、天智天皇の第7皇子である志貴皇子の没後、天皇の勅願によって皇子の山荘跡を寺としたのに始まると伝えられる。

また、かつてこの高円山付近に存在した石淵寺(いわぶちでら)の一院であったともいう。

石淵寺は空海の剃髪(そり)の師であった勤操が建てたとされる寺院である。

鎌倉時代になって西大寺の叡尊によって再興され、叡尊の弟子である道照が将来し経蔵に収めた宋版一切経の摺本によって、一切経寺とも呼ばれ繁栄した。

室町時代に兵火で建物が焼失し衰退するが、江戸時代の寛永頃に興福寺の空慶により復興される。

#### 本堂(奈良市指定文化財)

境内には他に御影堂、宝蔵、石庭、椿園、万葉歌碑などがある。重要文化財指定の仏像は本堂から宝蔵に移されている。

白毫寺にはかつて室町時代建立の多宝塔があったが、1917年(大正6年)に人手に渡り、移築された。移築先は長らく不明とされていたが、兵庫県東塚市切畑長尾山の個人所有の山荘に移築されていたことが後に判明した。この多宝塔は2002年3月19日、移築先の山火事で全焼した。

#### 文化財

##### 重要文化財

##### 木造阿弥陀如来坐像

白毫寺の本尊。檜材の寄木造で、平安時代末期から鎌倉時代頃の作といわれる。木造菩薩坐像(伝文殊菩薩)

もと多宝塔の本尊とされる白毫寺最古の仏像で、高く結った髻の形、両脚部の量感のある表現や荒々しい衣文表現などには平安初期彫刻の特徴をよく伝えており、9世紀にさかのぼる作とみられる。なお、多宝塔(現存せず)は室町時代の建物で、それ以前の伝来は不明であり、本来の像名も不明である(寺伝では文殊菩薩)。右手は第2・3指を立て、左手は持物をとる形をするが、両手首から先は後補で、本来の印相は不明である。

##### 木造地藏菩薩立像

鎌倉時代後期に造られた地藏菩薩像の秀作で、施された彩色も鮮やかに残っている。

##### 木造興正菩薩坐像

白毫寺を中興した興正菩薩・叡尊の肖像彫刻で、西大寺愛染堂の叡尊像と似ており、叡尊晩年の姿を見事にとらえている。

##### 木造閻魔王坐像

もと閻魔堂の本尊。鎌倉時代の仏像で、迫真性に富む険しい表情の像である。木造太山王坐像

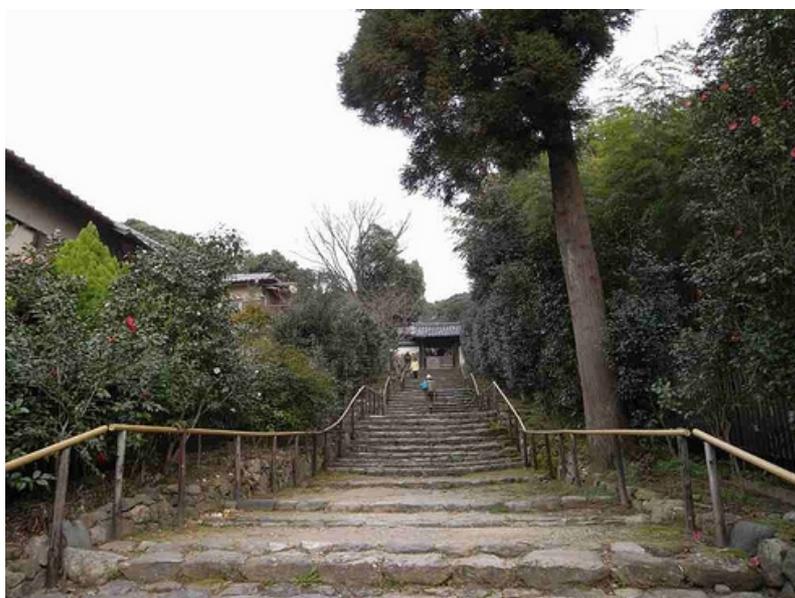
閻魔王とともに冥界の十王の一人。鎌倉時代の像で、体内に残された墨書により運慶の孫・康円が正元元年(1259年)の作と判明する。明応6年(1497年)に修理を受けていることが像内修理銘からわかり、冠、両袖、両脚部などに後補がある。[1]木造司命半跏像・司録半跏像

##### 木造司命半跏像・司録半跏像

ともに閻魔王の眷属で、康円一派の作である。閻魔王像、太山王像とともに、旧閻魔堂に安置されていた。

#### 五色椿(奈良県指定天然記念物)

東大寺開山堂の糊こぼし・伝香寺の散り椿とともに「奈良三名椿」の一つとして名高い。寛永年間に興福寺の塔頭、喜多院から移植したものとされる。





白毫寺の境内。

手前に見えるのが「本堂」で、奥が重要文化財の諸仏が収められた「宝蔵」。  
その間に建つ小さなお堂が、白毫寺の中興の祖・空慶上人を祀った「御影堂」です。

貴重な重要文化財に指定された仏さまを収めているのが「宝蔵」です。

迫力のある「閻魔王坐像」を中心に、その両脇には「司命半跏像」「司録半跏像」(全て重文)がいらっしゃいます。さすがに地獄を司る方々だけあって、表情は陰しく体格もご立派！頭部が大きめで、本当に裁きを下しているかのような力強さを感じます。脇侍のお二方が座る台座部分に虎の毛皮を模した彩色があるのもいいですね。

さらに、冥界の十王のお一人である「太山王坐像(重文)」もいらっしゃいます。こちらは運慶の孫・康円の1259年の作。奈良にはこうした閻魔さま系の仏さまは少ないため、本当に貴重な像を拝見できました。

また、同じ宝蔵には、鎌倉時代作の「地藏菩薩立像(重文)」がいらっしゃいます。こちらもとても美しい仏さまでした！お地藏様には素朴なものが多いですが、こちらはとても凛々しい表情です。彩色も鮮やかで、本当に見事です。

## 新薬師寺

「新薬師寺」の「新」とは、西の京にある「薬師寺」に対するものではありません。何故かと言いますと「新薬師寺」は華嚴宗、「薬師寺」は法相宗で宗派が違うからです。ここでの「新」とは新しいという意味ではなく、靈驗あらたかなの「あらたかな」という意味で、あらたかな薬師寺ということです。

平安時代に編纂された史料では天平十九年(747)に創建されたとありますが確証はありません。しかし、天平時代には「十大寺」の一つに数えられた大寺であったことは間違いありません。正面九間の「金堂」、「東塔・西塔」などの七堂伽藍を備えていたことから新薬師寺の創建時は壮大な伽藍だったことが想像されます。境内の敷地は四町四方といわれました。四町四方の約20万平方メートルという広大な寺院だったのが、落雷や台風の被害で次第に衰微し、今は十大寺の面影を偲ぶべきもなくこじんまりと佇み静寂さ漂う寺院となっております。

創建の理由は「聖武天皇」の病氣平癒を祈願して「光明皇后」が造営したようですが光明皇后の病氣平癒を祈願した聖武天皇が造営されたという説もあります。

金堂に安置された尊像は経典通りの「七仏薬師」で「薬師如来像」七軀、「日光菩薩像」七軀、「月光菩薩像」七軀、「十二神将像」の計三十三軀という多数でありました。薬師如来像と脇侍の日光・月光菩薩像の三尊像が七組さらに十二神将像が加わりそれが安置された状態は一大パノラマで壮観な眺めであったことでしょう。このように、経典に忠実に造営されたことは薬師信仰のピークを象徴しているのでしょうか。ただ、十二神将は七組の薬師三尊を守らなければならずその責務は大変だったことでしょう。

古代は経典に忠実に七体の薬師如来像を造立されたようですが時代が下ると薬師如来一尊と光背に六ないし七薬師如来を設けることによって七仏薬師を表すようになります。「千手観音像」も手を千本刻むと経典にありますそれが守られておりますのは「唐招提寺千手観音立像」「葛井寺の千手観音坐像」だけであります。

天平当時、薬師如来を本尊とした寺院は、日光菩薩、月光菩薩、十二神将の組み合わせで安置されておりましたが当時の姿をそのまま伝える寺院は存在いたしません。平安作の薬師如来像と天平作の十二神将像が共に国宝指定という新薬師寺であります。

ゆったりとした心地よい雰囲気漂っている新薬師寺は萩の寺としても著名で、その時期だけは静寂な伽藍ではなく多くの人で賑わう伽藍となります。

「志賀直哉旧居」を見学した後に「新薬師寺」へ回られるほうが効率的ですので志賀直哉旧居を説明しそれから新薬師寺へと向かいます。



街道筋

市内循環バス停「破石町(わりいしちょう)」の交差点に案内標識があり、「新薬師寺」まで0.8km、「志賀直哉旧宅」まで0.4km、「奈良市写真美術館」まで1.0kmとなっております。東行する閑静な街道筋を少し行き左に折れると間もなく「志賀直哉旧宅」に到着です。この街道筋をもう少し東に向かい右に折れると「新薬師寺東門」です。

志賀直哉旧宅のある「高畑町(たかばたけちょう)」は、壮大な伽藍を誇っておりました新薬師寺の境内だったところでした。境内地が田畑に変わってしまったので高畑町という地名になったとのことでした。

この街道を東へ真っ直ぐに行きますと「滝坂の道」の入口で滝坂の道を越えてさらに進みますと「円成寺」、「柳生の里」です。この街道は奈良市内とはいえ閑散とした通りです。



志賀直哉旧宅

「志賀直哉旧宅」は志賀直哉が9年間過ごされた住宅で現在は「奈良文化女子短期大学セミナーハウス」となっております。邸内は手入れがよく行き届いておりました。

高畑町は崩れかけた土塀が多くそれを美しいと喜ばれ多くの人が散策されて居りま

す。しかし、殆どの方が入口の入口で写真を撮影して素通りされるのは残念なことです。



質素な佇まいの書斎でした。落ち着いた風情の庭園を眺めてはしばしの休息と小説の構想を練られて「暗夜行路」などの名作を執筆されたのでしょうか。



「サンルーム」は和風ではありますが新薬師寺のような天井が化粧裏天井、床は禅宗様の瓦(博)の四半敷(新薬師寺本堂で記述)で当時としてはハイカラなサロンだったようです。

このサンルームは文化人が集まったといわれる「高畑サロン」で武者小路実篤、小林秀雄、尾崎一雄、梅原竜三郎などの著名人が多く集われましたがどんな芸術論を戦わしたのでしょうか。





閑静な住宅地である「高畑町」境界は奈良らしい面影を留めておりますので多くの方が訪れておられます。写真は一部の境界のもので荒果てた築地塀や美しい土塀がありますので古き奈良の風情に浸りながら新薬師寺へとお進みください。



本 堂



八重桜と本堂



南門から見た本堂

「本堂」は以前「何堂」だったかははっきりといたしません創建当初の「食堂(じきどう)」ではなかったかといわれております。

正面の中央の間だけが天平尺で16尺、他の間は10尺であります。中央の間だけが広いのは珍しいことです。1尺の寸法ですが、飛鳥時代は約35.5センチ、天平時代では

約29.5センチと短くなりますがそれから鎌倉時代にかけて少しずつ広がります。新薬師寺の1尺は29.8センチと天平尺より少し広くなっておりますので本堂の建立は天平末かも知れません。

「唐招提寺金堂」は中央間だけが16尺と広くそれから脇間に向かって順次狭くなっており、天平時代は主要な仏堂以外の堂宇はすべて等間隔での建築であることからすると、本堂は金堂級ではないけれども重要な建物の一つだったことは間違いありません。ただ、天平時代の母屋の梁行は2間が通有であるのに3間となっております。当初から予定されていた如く現在ある大きな土製の円形須弥壇が設置されるのに都合の良い空間となって居りますとは理解し難くそうかといって建築様式が天平時代のものであるだけに後の時代に新設されたとは考えられません。

他堂が本堂に転用された頃には、本尊を安置する仏堂の名称が古代の金堂から後の時代の呼称である本堂と称されておりました時期だったので本堂と称されたのでありましょう。それと、「天平時代の金堂」は「寄棟造」ですが現在の本堂は「入母屋造」です。古代の仏堂では寄棟造が最高で格式のある仏堂の形式だったのが時代が下ると我が国では屋根に変化ある入母屋造が好まれ寄棟造に取って代わりました。

勾配が緩い軽快な屋根と落ち着いた気品漂う外観は典型的な天平建築です。穏やかな屋根ですと雨漏りがして建物の傷みが激しく維持管理費がかさみますので、後世、他の寺院では雨漏りの問題を解消するため急な屋根勾配に改変いたしましたので古代の屋根が見れるのは当寺院のみとなりました。

南門からじっくりと眺めてみてください。安定感のある優美な仏堂を心ゆくまでお楽しみください。

裳階なしの単層でしかも窓がありませんのと白壁の大きさが一際目立つ仏堂も珍しいだけに大きな特徴といえましょう。また、大きすぎる扉とのモノクロのコントラストが古代建築の特性である装飾が無く簡素な造りとあいまって日本人好みの古色蒼然な感じになっております。扉は内開きで古代の様式です。



大斗肘木

「大斗肘木」が組物であることから金堂級の建物でなかったことが分かります。天平時代の金堂なら「三手先」となります、三手先もいいですが大斗肘木は簡素な美しさがあります。



丸地垂木

角飛檐垂木

古代の様式で「丸地垂木」に対して「角飛檐垂木」が短いです。時代とともに飛檐垂木が長くなってまいります。これが理解できますのが東大寺三月堂で、訪れられましたら軒下をご覧ください。天平時代と鎌倉時代の建築様式の違いが一目瞭然です。



鬼瓦(新薬師寺)



鬼瓦(法隆寺)

現存最古の「鬼瓦」と言われております。仏敵を威嚇するような面相ではなく愛嬌のある獣面です。牙は見えますがいまだ角が生えておらず仏敵を威嚇するような恐ろしい面相でないことから、呼称は鬼瓦ではなく「棟瓦」とか呼ばれた時代の作品でしょうか。製作時期は天平とも鎌倉時代ともいわれております。法隆寺の鬼瓦は聖徳太子が発願建立されました「法隆寺若草伽藍」跡から出土した飛鳥時代作の鬼瓦で、現在複製したものが法隆寺大宝蔵院の屋根に乗っております。



「東方の瑠璃光の光を浴びて下さい」と掲示されております。

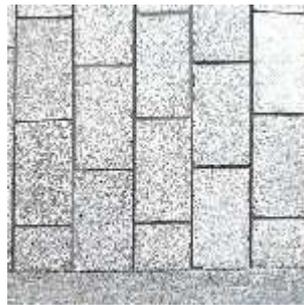
往時を偲ばせる本堂の東側の壁には「ステンドグラス」が嵌められ、シルクロードの原点であるギリシャをイメージさせるものとなっております。

前回、許可を得てステンドグラスを撮影しておりますと「朝来ていただくと朝日により床に文様が映りきれいです」と親切に教えていただきましたので今回(2006.04)は朝一番の9時に参りましたが今ひとつでした。太陽の影が長くなる季節でないと文様が床に美しく映えないようです。

「東方の瑠璃光の・・・」とは当寺の本尊が薬師如来であり薬師の浄土が東方浄瑠璃世界だからです。



四半敷(参考写真)



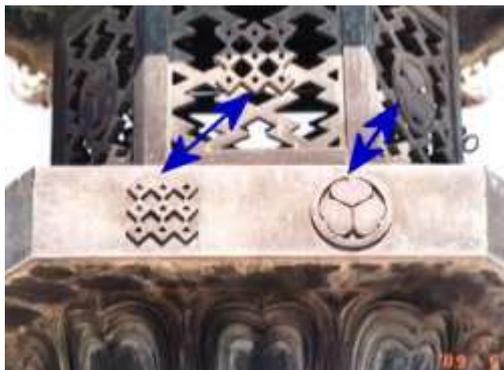
布敷(参考写真)

床の敷石、敷瓦の並べ方は布敷(ぬのじき)と四半敷(しはんじき)があつて、本堂の床は瓦の四半敷です。四半敷とは瓦(塼)を壁の線に対して瓦の目地が45度の角度になるように敷き詰めたものです。四半とは40度と10度の半分からきたもので、バイクの750CCを

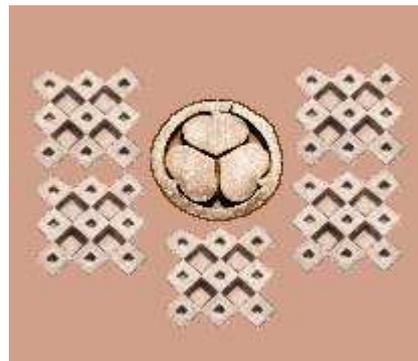
七半というのと同じです。鎌倉時代に禅宗様建築で大いに賞用されたのがきっかけで和様建築でも大変好まれ多くの土間床が四半敷の床に改変されております。ただし、平安時代は板敷き床でありますので関係ありません。

古代は石の布敷で石を平行に敷いた様式です。

天井は珍しい「化粧屋根裏」で、天井を張っておらず構造を露出させ構造美を狙っております。化粧屋根裏天井の化粧とは木材をきれいに削り仕上げたということで彩色仕上げという意味ではありません。「内陣・外陣のある堂」では「外陣」を化粧屋根裏天井にすることが多いです。化粧屋根裏天井の仏堂では我が国最大であります。



九目結紋 葵紋



柱 絵(本堂) (参考図)

徳川綱吉の母「桂昌院(けいしょういん)」の寄進により、「薬師如来像」「十二神将像」などの修理をした記念として、本堂の柱の上部に、徳川家の家紋「葵文(あおいもん)」と桂昌院の実家本庄家の家紋「九目結文(ここのつめゆいもん)」が描かれております。本尊の前に立ち右の柱の上部をご覧ください。絵は退色しておりますが堂内は蛍光灯の照明があり肉眼でも十分に確認できます。

家紋の参考として、法隆寺に安置されている「燈籠」の写真を載せておきました。この次、法隆寺を訪ねられましたら「大講堂前の燈籠」で「この紋所が目に入らぬか」を是非確認してください。法隆寺では横に並べてありますが新薬師寺の柱絵は葵文を囲む九目結文となっております。

堂内一杯に設けられた円形の須弥壇は直径が9メートル、高さが90cmで漆喰仕上げが施されております。円形の須弥壇は珍しく我が国では最大の大きさを誇っております。堂内には円形の須弥壇の両脇になぜか広い空間があります。

鎌倉時代には正面に礼堂を付加したり天井が張られましたのを明治の解体修理の際撤去し旧形式に復元いたしました。

「薬師如来坐像」は像高 191.5センチで丈六(240センチ)に満たず少し小さいように思えますが創建当初、金堂には薬師如来像が七体も安置されていたので丈六仏ではなく現在の



薬師如来坐像

本尊の寸法だったのでしょう。本尊の場合は光背の薬師如来六仏と合わせて七仏薬師を表しております。

木彫像の素材は「桧」といわれるのになぜかこの時代は「榧(かや)」の「一木造」が多いです。

一木造と言っても膝の部分は別木を組み合わせて制作いたします。通常、膝木は本体の縦木に対し横木を用いますが本尊の場合は手間の要する膝木まで縦木を用いております。このことは、木目を揃えることで、一本の原木で彫りだす一木造の考えを尊重した結果でありましょう。

榧の木は生長が遅いので仏像には余り使われておりませんが美しい木目と年輪の緻密さが檀像風の仏像に適しているのと装飾に適した材のため用いられたのでしょう。

檀像風に仕上げるため、肌を漆箔で金色にしたり、本体に彩色仕上げの文様を施さず素木の像であります。ただ、素木のままといいましても髪の毛の群青、眉・瞳・髭の黒、唇の朱の彩色は行います。

金箔が剥落したり彩色の色が退色する方が我が国好みであります。本尊は初めからそれらを施さず素木のままというところが凄いです。

素木の「薬師如来像」の制作は弘仁・貞観時代の主流となりました。

右手は「施無畏印(せむいん)」、左手は「与願印(よがんいん)」であります。施無畏印は衆生の恐れ、苦しみを取り除き、与願印は庶民のどんな望みでも叶えてもらえる印相であります。現世利益の施無畏印・与願印は、釈迦如来、阿弥陀如来像ともに使われました。そこで、見分けがつきやすいように平安時代から薬師如来像は「薬壺(やくこ)」を持つことが当たり前となったのであります。ところが、法隆寺西円堂本尊の「薬師如来坐像」は天平時代の脱活乾漆造であるにもかかわらず既に薬壺を持つておられます。

分厚い唇、太い頸、がっちりとした豊かな胸、太い腕、量感あふれる堂々たる体軀で見る者を圧倒しており他の時代には見られぬ特徴です。

如来には絶対になければならない「白毫(びやくごう)」がありません。白毫がないのは「飛鳥時代」の一部と「弘仁・貞観時代」の殆どに限られますが弘仁・貞観時代作であります「元興寺の薬師如来立像」には白毫があります。元興寺像は現在(2006.04)、奈良国立博物館で展示されておりますが展示時期については奈良国立博物館でご確認

ください。

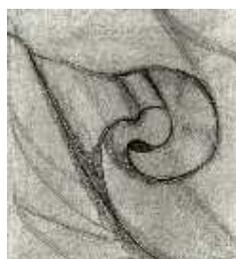
螺髪（うねりかみ）の粒が大きい割には「肉髻（にくせき）」が神護寺薬師如来像に比べて余りにも低過ぎます。

仏像で人間の眼に近いのは飛鳥時代の杏仁形（けりまがた）でそれ以降は半眼（はんまなこ）でいかにも瞑想するような眼の形であるのですが、本尊は黒目が憤怒像のように目頭により、大きく見開いています。大きく見開いた異様な眼の印象から、光明皇后の発願で聖武天皇の眼病平癒を祈って造像されたとも言われております。が、光明皇后の健在な時期は天平時代で本尊が制作されたのは次の弘仁・貞観時代であり時代が全然合わないのです。本尊の眼が強く印象に残る極端に大きいものですから眼病平癒の話が誕生したのでありましょう。

右手の掌が右に傾いているのも異例です。

膝が高い組み方です。膝が高いの言うことは膝の左右の広がりを抑えて組んだ結果で、次の藤原時代は膝の左右の広がり大きい組み方のため当然膝の高さが低くなります。（例 平等院阿弥陀如来像）

現在、脇侍の「日光・月光菩薩像」は安置されておられません。



渦文



茶杓文

衣の表現には大変な力の入れ方で、襷（たすき）の線が丸い線（大波）と尖った線（小波）が交互に表出した翻波式衣文（ほんばしきえもん）さらには、茶杓文（ちやくもん）、渦文（かもん）の襷が刻まれており、このことは、木という材質の特性を最大限に発揮しており、天平時代の脱活乾漆造の「漆」では角が欠け易くて出来ません。

弘仁・貞観時代までは霊木信仰による一木造だからこそ彫りの深い彫刻が可能で、次の藤原時代の内割りをする「寄木造」では干割れなどの破損を防ぐために木の肉厚をなるべく薄く仕上げるのでどうしても彫りは浅くなってしまいます。

病気になれば神仏に頼らざるを得ない時代ですから薬師如来は大いにもてはやされたと思われるが本尊は病気快癒祈願の仏さんとは考え難く、興味が尽きない尊像です。他の時代ではお目にかかれぬ特異な薬師如来像が流行した理由については

『平安初期彫刻の謎』、著者松村史郎、発行（株）河出書房新社 03-3404-1201を参考にしてください。

大手企業のトップとして豪腕をふるわれた松村さんの作品は読みやすく、かつ読み応えある本です。

私もなにか書き物で残したいと思っておりましたが、松村さんの本の内容に衝撃を受けて、到底無理と諦めました。松村さんと韓国へ一緒したときもまだまだ勉強をしなければと言われたことが印象深く残っております。その松村さんともう一度お会いしてゆっくりとお話を受けたまらったのですが今は鬼籍に入られ願いは叶わなくなりました。

「十二神将像」が安置された「円形の須弥壇」は土製で、直径9メートル、高さ90センチの大きさで他寺では見られぬものです。その須弥壇の中央に本尊を祀り、それを圍繞するように十二神将像が安置されております。十二神将は薬師如来を守護する眷属

(けんぞく)で、外側に向かって立ち、薬師如来を仏敵から守っております。

像高は1.54から1.70センチであります。等身大の十二神将像は新薬師寺像が最後でこれ以後は小振りの十二神将像となります。

十二神将像では現存最古の像で「本尊」が弘仁・貞観時代の作品であるのに、「十二神将像」は天平時代の作品です。

十二神将とは伐折羅(ばさら)・阿彌羅(あにら)・波夷羅(はいら)・毘羯羅(びぎやら、びから)・摩虎羅(まこら)・宮毘羅(くびら)・招杜羅(しょうとら)・真達羅(しんたら)・珊底羅(さんてら)・迷企羅(めいきら、めきら)・安底羅(あんてら)・因達羅(いんだら)神将(大将)です。これら十二神将像の呼び方ですが新薬師寺での呼称と、国宝指定の名称(下線部分)とがあります。伐折羅は迷企羅、頰彌羅は頰彌羅、波夷羅は宮毘羅、毘羯羅は毘羯羅、摩虎羅は摩虎羅、宮毘羅は招杜羅、招杜羅は珊底羅、真達羅は真達羅、珊底羅は安底羅、迷企羅は因達羅、安底羅は伐折羅、因達羅は波夷羅ですが私は当寺の呼称で記述いたしております。波夷羅像は補作でありますゆえ波夷羅像以外の十一体の神将像が国宝指定であります。

新薬師寺の十二神将は干支の仏さんで、因達羅は巳、安底羅は申、迷企羅は酉、珊底羅は午、真達羅は寅、招杜羅は丑、宮毘羅は猪、摩虎羅は卯、毘羯羅は子、波夷羅は辰、頰彌羅は未、伐折羅は戌で、我が国最古の干支の守り神です。

因達羅像の台座の銘に「為七世父母六親族神王御座造・・・」「七世父母為朝庭・・・」と親族のために台座をつくったとあり個人的な祈願だったようです。朝庭という文字が付け足しのように書かれておりますが。造像が私的な願いだったことから考えると官寺でない岩淵寺(いわぶちでら)より移安されたという説に真実味が出てまいります。それから、当時は庭儀の時代ですから現在のような朝廷ではなく朝庭と書きました。

「塑像」の材料は粘土であるため、脆いうえ重量がある欠点があります。写実主義の天平時代では数多く作られましたが、次の平安時代は木彫像が主のため写実的表現を重んじる肖像彫刻などに採用されるだけで遺品が少ないです。

(数少ない遺品の一つに「法隆寺夢殿の道詮律師像」があり、平安時代の塑像です。)

塑像は土を焼くこともなくただ乾燥させるだけなのに奈良盆地のような高温多湿の悪条件下で1,200年余り保存できたのは優れた技術があればこそです。東南アジアで塑像が残っている地域は乾燥地帯で、奈良のような高湿度地帯では存在いたしません。

黒目は当時は宝石並みの価値があったガラス玉を使用しております。

東大寺三月堂、戒壇院像の節度ある静かな像から見ると、激しい動きがあるバロック的な十二神将像です。

胃を被るものは因達羅、安底羅、頰彌羅で、珊底羅だけが肩に獅嚙(しがみ)を施したり、摩虎羅だけが脛当を着けずズボンのようなものを着用したり、一体として同一のポーズがなく様々な像容で拝観する者に楽しみを与えております。簡素な器(本堂)に合わせるが如く装飾的な表現は施しておりませんが、当初の華麗な彩色文様を残しておりますので眼を凝らしてご覧ください。

薄暗い静寂な堂内をゆっくりと、常道の右繞(うにょう・時計回り)で十二神将像を礼拝されますと最後に伐折羅像と感激の対面となり更なる感動が生まれ古都奈良へ来た喜びが込み上げてこられることでしょう。



伐折羅像

「伐折羅像」は十二神将像の中でも傑出した秀作で像の前に立つと、像の激しい威嚇に圧倒されて一瞬たじろがれること間違いなしです。

頭は冑(かぶと)を着用せず、「怒髪(どはつ)天を突く」であります。

口をかつと大きく開けて咆哮し、五指を広げるのではなく左手の中指と薬指のみの間を大きく広げて仏敵を威嚇しております。

他の像は布製の腰紐であるのに本像は豪華な石帯(バンド)を着用しております。

太平洋戦争後、新しい日本銀行券が発行されるに際し当時、我が国を占領していた「GHQ(連合軍最高司令部)」は新様式の通貨の製造、発行は事前承認を要求しました。発行予定の新しい通貨のうち「十円券」の肖像に本像のデザインを提案すると、「伐折羅大将の形相は戦争に敗れた日本国民の憤怒を表している」と、すなわち、

「連合軍」に対する日本国民の怒りを表しているということで却下されました。

異国の人間が憤怒の表情を恐ろしいとたじろぐくらい見事な憤怒表現です。もし、東大寺戒壇院の四天王像だったら猛々しく感じられないので憤怒像とは理解されず承認されたかもしれませんね。結局、十円券の図案は伐折羅大将から国会議事堂に代わりました。

余談ですが戦前お札の肖像図案七人のうち一人だけ残ったのが「聖徳太子」です。高額紙幣といえば聖徳太子だったのが、残念ながら昭和59年11月1日に隠れてしまいました。

荒ぶる本像は人気度が高く奈良の観光ポスターだけでなく郵便切手にも採用されるという売れっ子であります。

天平時代の四天王像の違いは像の背面に垂れる裳裾であります。

「迷企羅像」は他の像にくらべるとひときわ長く垂れています。

平安時代になると四天王像も裳裾が現れます。

左手を真っ直ぐ上に伸ばした像は珍し



迷企羅像

りは俺に任せよとの意思表示でしょうか。左足の踵を石の上に挙げているのも何を意味するのか分かりませんが仏師にそれなりの思惑があつてのポーズでありましょう。

新薬師寺像は十二神将像の最高峰といえるもので見る人を飽きさせなく魅了し続けております。



南都 鏡神社

く薬師如来を仏敵から守るにふさわしく躍動感にあふれる頼もしい相貌です。

土の素材を生かした塑像だからこそ出来た表現でしょう。また、肘のあたりにある「鱗袖」により筋肉質の腕が強調されているように見えます。

「珊底羅像」だけが鱗袖でなく、獅子の「獅嚙(しがみ)」を付けているので注意してください。

右手を腰に当て左手を大きく挙げているのはまことに壮観です。何を表す動作かは理解できませんが本尊と須弥壇の守

南都「鏡神社」は新薬師寺と隣接しており訪れると赤い鳥居が目立ち新薬師寺より先に目に入ります。

鏡神社は大同元年(806)に新薬師寺の鎮守として勧請されたと伝えられております。

藤原広嗣は九州で兵を起こした「藤原広嗣の乱」の張本人ですが「興福寺のお話」で出てくる左大臣「橘諸兄」を敵に回したのが運命の分かれ目で広嗣は戦いに敗れ処刑されます。その広嗣の怨霊を鎮めるために本殿

に広嗣の霊をお祭りしてあるとのことでした。

この乱は聖武天皇にとって衝撃が大きかったのかそれ以後遷都が始まり都が転々と移動いたしました。結局、都は平城京に戻りまして目出度し目出度しでした。

「本殿」は「春日大社の第三殿」が延享三年(1746)に移築されたものです。

春日大社の本殿は、本殿のある敷地内には神職以外は立ち入れず、何人も絶対に見ることが出来ないだけに当本殿は貴重なものといえましょう。

本殿前には拝殿(仏教では礼堂)がありますが儀式以外は立ち入れないようです。ですから、近くまでよって拝観することは出来ませんが低い塀越しによく見えますのでどうぞご覧ください。



本 殿



奈良市写真美術館

「奈良市写真美術館」は新薬師寺と隣接しており歩いて1分で着くます。

「入江泰吉」が生涯古都奈良の風情や仏教美術を撮り続けた記録写真が保存、展示されております。



## 新薬師寺の建物

[トップページへ](#)



### 本堂 (国宝：奈良時代・入母屋造り、本瓦葺)

なだらかな曲線の大屋根と大きな白壁が、堂々とした天平建築を表しています。創建当初は金堂(本堂)ではなく別の目的のお堂でした。内部は土間に太い柱が立つ、簡素で力強い造り。天井は屋根裏がなく、化粧屋根の構造が直に見ることができます。貴重な奈良時代・創建当初の建造物です。



## 南門 (鎌倉時代/重文)



基壇は乱石積で、その上にしっかりと大きい面取りのある4本の柱が立つ四脚門。  
この種の門としては、鎌倉時代中期のどっしりとした威厳があります。

## 東門 (鎌倉時代/重文)



本柱の上が二つに割れ、板葺(かえる)股を挟んでいる珍しい様式で、鎌倉初期の手法を示しています。

## 鐘楼 (鎌倉時代/重文)



弘安2年(1279)建立の袴腰が珍しい作例です。  
中の梵鐘(ほんしよ)〈重要文化財〉は天平時代の貴重なもので、『日本霊異記(にほんりょういぎ)』にある道場法師鬼退治で名高い釣鐘です。

## 地藏堂 (鎌倉時代/重文)



方一間の小さな仏堂建築としては、鎌倉時代を代表するものです。  
現在は十一面観音像が安置されています。



## 本尊薬師如来坐像

(国宝：平安時代初期・一木造)

本堂中央の円壇に、木彫の大きな薬師如来坐像が安置されています。大きく見開いた切れ長の目と引きしまった口元のお顔、厚い肉付きの堂々とした体軀(たいく)が特徴です。光背(こうはい)に8体の化仏(けぶつ：小さな薬師如来坐像)があり、本尊と合わせる七仏薬師になります。  
昭和50年の調査で、像の体内から平安初期の法華経(国宝)が8巻見つかりました。

## 病苦を救う医王如来

ALL THE SICKNESSES ARE CURED



本尊の薬師如来の正式名は薬師瑠璃光如来(やくしるりこうにょらい)といひます。人々の病や苦しみを取り除き、災害を止めるなどの12の願いを解決して如来になったといひます。主に病に苦しむ人を救う医王如来として信仰されています。薬師如来が手に持っておられる薬壺には、体・心・社会などのあらゆる病を治す霊薬が入っているのです。

阿弥陀如来が西方極楽浄土(死後の世界)を約束しているのに対し、薬師如来は東方浄瑠璃世界(とうほうじょうりゆり：生きている今の世界)を約束します。瑠璃とは地面を削っている青い石のことで、現世の意味でもあります。



▲心と体と社会の病気を治す霊薬が入っている薬壺

### 木造薬師如来坐像

当寺の本尊。像高191.5センチメートル。制作年代は記録がなく不明であるが、新薬師寺の創建期まではさかのぼらず、平安時代初期・8世紀末頃の作と見るのが一般的である。坐像で高さ2メートル近い大作だが、頭・体の主要部分はカヤの一木から木取りし、これに脚部、両腕の一部などを矧ぎ付ける。矧ぎ付け材も同じ材木から木取りされ、木目を縦方向に合わせるように造られていることが指摘されている。眉、瞳、髭などに墨、唇に朱を差すほかは彩色や金箔を施さない素木仕上げとする。一般の仏像に比べ眼が大きいのが特徴で、「聖武天皇が光明皇后の眼病平癒を祈願して新薬師寺を創建した」との伝承も、この像の眼の大きさと関連づけられている。昭和50年(1975年)の調査の際、像内から平安時代初期と見られる法華経8巻が発見され、国宝の「附(つけたり)」として指定されている。光背には6体の化仏が配されていて像本体と合わせると7体となり、『七仏薬師経』に説く七仏薬師を表現しているとみられる。また、光背の装飾にはシルクロード由来のアカンススという植物の葉と考えられている装飾がある。

### 塑造十二神将立像

十二神将は薬師如来の眷属である。円形の仏壇上、中央の本尊薬師如来像を囲んで立つ。木造の本尊とは異なり、奈良時代に盛んに造られた塑像である。これらの像は高円山麓にあった岩淵寺から移されたとする伝承もあるが、造立の事情は明らかでない。作風や、12軀のうち1軀の台座裏から「天平」云々の墨書が見出されたことなどから、天平期の作と見なされている。同じ塑造の傑作として知られる東大寺戒壇院の四天王像の造形と比較すると、ポーズが大振りになっており、東大寺像よりも時代が少し下ると見られている。12軀のうち1軀(宮毘羅(くびら)大将像、寺伝では波夷羅(はいら)大将像)のみは江戸時代末期の地震で倒壊し、昭和6年(1931年)に細谷而楽が補作したもので、国宝指定外である。本尊に向かってすぐ右に立つ像(迷企羅(めきら)大将像、寺伝では伐折羅(ばさら)大将像)は日本の500円切手のデザインに使用されている。





こうやくしにょらいりゅうぞう  
**香薬師如来立像** (飛鳥時代/旧国宝)

高さ75cmの小さな金銅仏。白鳳彫刻の代表作として名高い仏像でしたが、昭和18年に3度目の盗難にあい、現在も行方はわかりません。幸い実物をかたどっていたため、レプリカを安置していますが、笑みを含んだ少年のような表情や衣の表現などに白鳳時代（飛鳥時代後期）の造形的特徴をご覧いただけます。



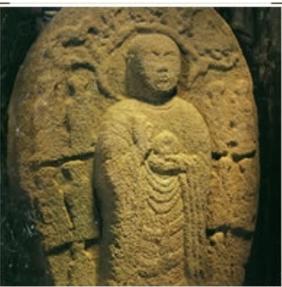
かげきよじぞうぞん  
**影清地蔵尊** (地蔵菩薩立像着衣像/鎌倉時代/木造)

近隣の地蔵堂から新薬師寺に移されてきた地蔵尊。平家残党の平影清の伝承にちなんで影清地蔵とも言われています。



**おたま地蔵尊** (地蔵菩薩立像裸形像/鎌倉時代/木造)

近年、影清地蔵尊の体内から発見された裸形の地蔵尊。安産や健康など、霊験あらたかなお地蔵さんで、信仰を集めています。



じゅうおうぼざつりゅうぞう  
**十王菩薩立像**

十王仏を光背に浮き彫りにした貴重な石仏です。



**十三重の塔** (奈良時代)

東大寺二月堂の修二会（お水取り）を始めた実忠（じつちゅう）和上の塔。倒壊などのため現在は五重の石塔になりましたが、下2段が創建当初のもので、上部は修復されたものです。



**法華経八卷** (天平時代/国宝)

近年、本尊薬師如来坐像体内から発見されました。「オコト点（送り仮名）」が付された珍しい経典です。



## 石灯籠 (室町時代/重要美術)

基礎部分の蓮台は天平時代のもの。その上の灯籠は室町時代の作。



## あいづやいち 会津八一の歌碑

奈良を愛した会津八一(秋艸道人)の歌碑(第一号基)があります(本堂西)  
「ちかづきて あふぎみれども  
みほとけの みそなはずとも あらぬさびしさ」

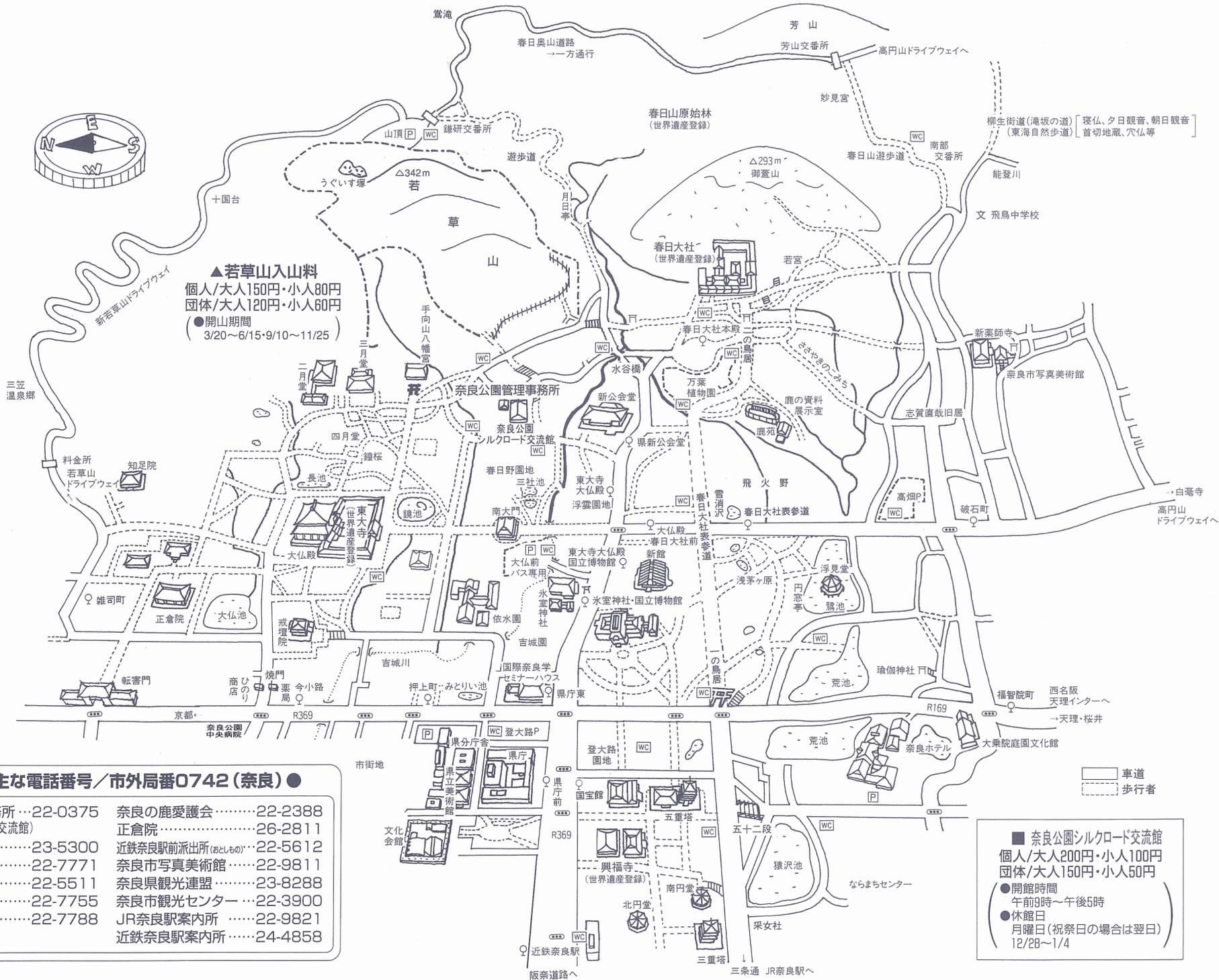


## 釣鐘 (天平時代/重要文化財)

もとは元興寺の釣鐘だったとも伝えられています。  
天平時代のこと、元興寺の釣鐘堂にたびたび鬼が出て、町民を苦しめていました。元興寺の僧侶・道場法師は、鬼を退治しようと釣鐘堂で待ち構えることにしました。道場法師は歩くだけで地面が3寸下がると言われたほどの怪力の持ち主だったそうです。待ち伏せされた鬼は「これはかなわない相手だ」とわかり、東の方に逃げました。道場法師は追いかけたのですが、四つ辻のところで鬼を見失いました。  
以来、鬼を見失った不審な辻を『不審ヶ辻町』という町名で、鬼が逃げて隠れた場所が『鬼隠山』という名で残っています。  
鎌倉時代、元興寺の釣鐘堂が焼けたため、残った釣鐘を新薬師寺に持ってきたと伝わっています。新薬師寺の釣鐘に多くの傷跡があるのは、伝説の鬼の爪痕だといわれています。



# 奈良公園周辺マップ



**▲若草山入山料**  
 個人/大人150円・小人80円  
 団体/大人120円・小人60円  
 ●開山期間  
 3/20~6/15・9/10~11/25

**●観光地の主な電話番号／市外局番0742(奈良)●**

- |                              |         |                 |         |
|------------------------------|---------|-----------------|---------|
| 奈良公園管理事務所<br>(奈良公園シルクロード交流館) | 22-0375 | 奈良の鹿愛護会         | 22-2388 |
| 若草山                          | 23-5300 | 正倉院             | 26-2811 |
| 奈良国立博物館                      | 22-7771 | 近鉄奈良駅前派出所(おしもの) | 22-5612 |
| 東大寺                          | 22-5511 | 奈良市写真美術館        | 22-9811 |
| 興福寺                          | 22-7755 | 奈良県観光連盟         | 23-8288 |
| 春日大社                         | 22-7788 | 奈良市観光センター       | 22-3900 |
|                              |         | JR奈良駅案内所        | 22-9821 |
|                              |         | 近鉄奈良駅案内所        | 24-4858 |

**■奈良公園シルクロード交流館**  
 個人/大人200円・小人100円  
 団体/大人150円・小人50円  
 ●開館時間  
 午前9時~午後5時  
 ●休館日  
 月曜日(祝祭日の場合は翌日)  
 12/28~1/4



# 若宮15社めぐり MAP





# 奈良公園MAP

## 東大寺



天平文化の象徴といってもよい寺で、世界最大の木造建築である大仏殿や、見事な彫像群が並び法華堂、伝統行事の「お水取り」の舞台である二月堂など、じっくり見て回ると、一日かけても足りないほど。

<問い合わせ>電話番号:0742-22-5511

<交通>・JR奈良駅、近鉄奈良駅から奈良交通バス(市内循環外回り)「大仏殿春日大社前」下車、徒歩約5分  
・近鉄奈良駅から徒歩約20分

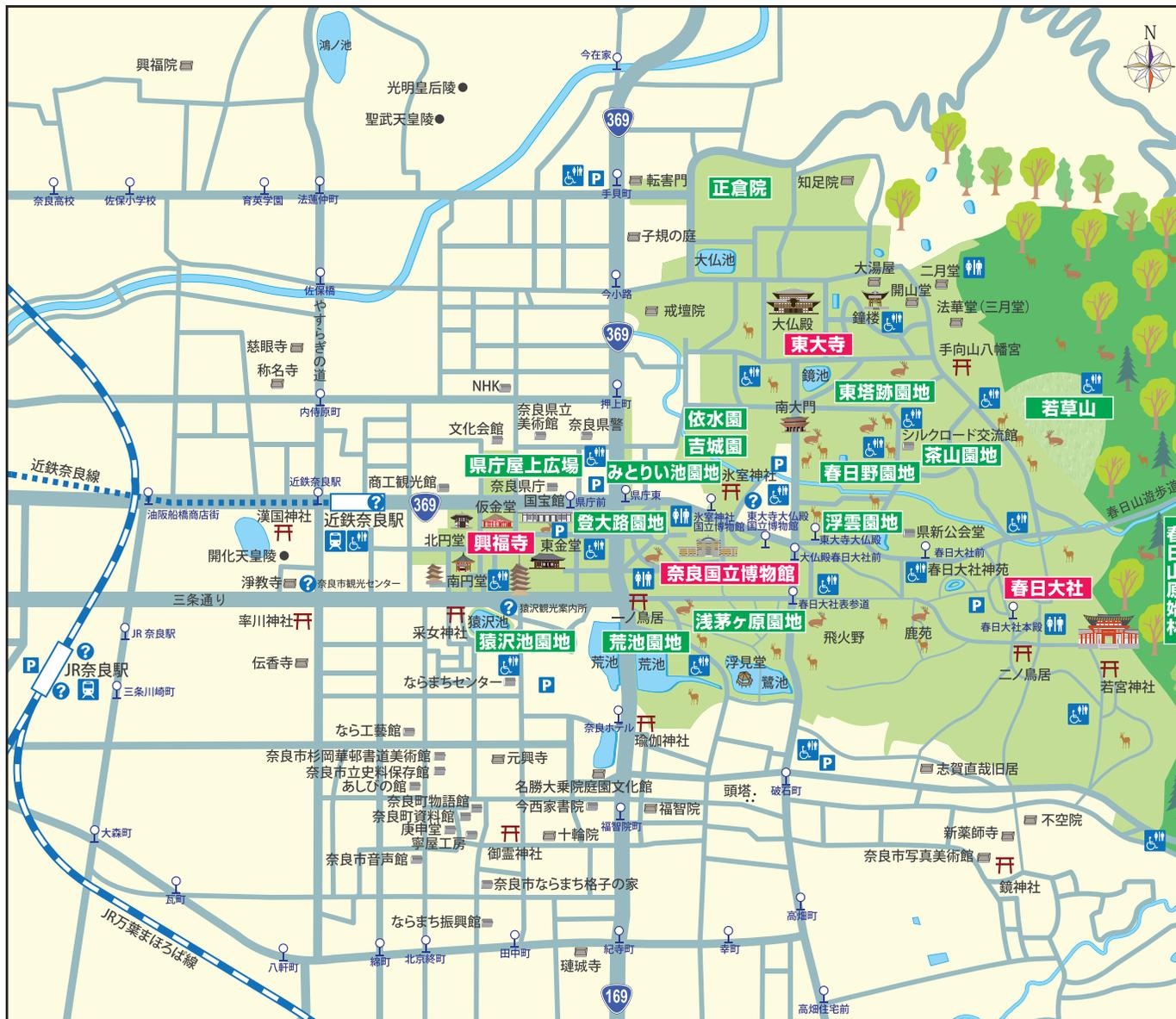
## 奈良国立博物館



校倉造りを模した昭和の西新館と、それに明治27年(1894年)に建てられた旧帝國博物館時代の本館、およびその付属棟の4つの展示館からなる。仏教美術を中心に数多の名品が集められ、展示は他に類のない充実ぶりである。

<問い合わせ>電話番号:050-5542-8600  
(NTTハローダイヤル)

<交通>・JR奈良駅、近鉄奈良駅から奈良交通バス(市内循環外回り)「氷室神社・国立博物館」下車すぐ  
・近鉄奈良駅から徒歩約15分



凡例



## 春日大社



一の鳥居を抜けて長い参道を行くと、鮮やかな朱塗りの社殿が、緑濃い杉木立の中に浮かぶように姿を見せる。社殿と回廊には釣燈籠が、参道両側には石燈籠が並び、すべての燈籠に火が入る万燈籠の日(2月・8月)は幽玄そのもの。

<問い合わせ>電話番号:0742-22-7788

<交通>・JR奈良駅、近鉄奈良駅から奈良交通バス(市内循環外回り)「春日大社表参道」下車、徒歩約10分  
・JR奈良駅、近鉄奈良駅から奈良交通バス(春日大社本殿行)「春日大社本殿」下車すぐ  
・近鉄奈良駅から徒歩約25分

## 興福寺



最盛期には寺の建物の数が175もあった大寺。有名な五重塔を始め、東金堂、阿修羅像などを安置する国宝館があり、新御能や節分の鬼追いなど古来の日本文化を伝える行事も多く残る。

<問い合わせ>電話番号:0742-22-7755

<交通>・JR奈良駅から奈良交通バス(市内循環外回り)「県庁前」下車すぐ  
・近鉄奈良駅から徒歩約5分

# 1 一之鳥居 から 二之鳥居へ



- 1 一之鳥居
- 2 影向の松・表参道の馬場  
浅茅が原
- 3 春日御塔跡
- 4 御旅所  
飛火野・春日野
- 5 春日大社表参道バス停
- 6 お杯の清流
- 7 雪消の沢・野守の鏡
- 8 飛火野の大楠  
大仏殿前の交差点からの春日遊歩道
- 9 馬止橋・内侍道

春日大社の表玄関、一之鳥居をくぐると東へ、馬場としても用いられた真っすぐな参道が続きます。藤原氏の貴族たちが、華やかな行列を整えて進んだ道でもあります。入ってすぐ右手の丘の上には、おん祭に神様が降りてこられるという影向の松があります。



一之鳥居には、大きな鉄の輪が付いて、春日祭やおん祭にはここに大楠（現在はなぎ）が立てられます。江戸時代までは常に立てられていました。俗界との境である鳥居は、神様が現れる神聖な場所です。

影向の松(ようごうのみつ)



競馬のスタートは、馬出橋、小さな橋ですが石の柱に「馬出橋」と刻んであるので探してみてください。

### ■ 浅茅が原(あさじがはら)



右手には、苔むした丘に清流が流れる浅茅が原。シイや桧、春日杉などの巨木も点在しています。丘の向うには、片岡梅林や鷺池・浮見堂があります。

### ■ 春日御塔跡



左手には、奈良国立博物館の敷地が広がります。ここも昔は春日社の境内で、平安末期に鳥羽上皇と、藤原忠実の建てた2基の美しい塔が立っていました(写真上:西塔跡、写真下:東塔跡)。遺構が保存され、詳しい説明もあるので、時間のある方は立ち寄ってみて。曲がり角のムクロジの大木にもご注目！



### ■ 表参道のムクロジ



奈良博への曲がり道には、ムクロジの大木、幹が空洞になって、そこから竹が伸びています。子供を抱く母のような優しい姿です。秋に実る果実は、黄褐色で半透明。中に真っ黒い堅い種子が入っています。この種子は、羽根突きの羽根の下の重りや数珠に用いられてきました。果被は、石鹼の成分が含まれていて代用品ともなり、子供たちの遊びにも用いられました。

### ■ 御旅所



右手には、苔むした丘に清流が流れる浅茅が原。シイや桧、春日杉などの巨木も点在しています。丘の向うには、片岡梅林や鷺池・浮見堂があります。

## ■ 飛火野・春日野



循環バスの通る舗装道路を渡ると、右手には、芝生の美しい広々とした野原が広がり、御蓋山(みかさやま)の絶好のビューポイントでもあります。この美しい芝地は、また鹿が常に群れ遊ぶ所です。

### ● 飛火野(とびひの) ●

現在は飛火野と呼ばれていますが、古くは春日野とも呼ばれ、御蓋山を仰ぐ古代祭祀の地でした。また万葉の昔には貴族たちが、打球(ポロ)をしたことが、知られ、平安時代にも王朝人のあこがれの名所で、特に若菜摘み、花見など春の遊びの名所でした。古代の人の信仰と自然を愛する心を是非体感してください。

### ● 春日野の地獄 ●

春日の神様は慈悲深い神様で、春日社に縁のあった人は、罪があっても普通の地獄には落とさず、春日野の下に地獄を構えて、毎日罪人に水を注がれてその苦しみをやわらげられたとの話が、『春日権現験記』に載っています。この清流を「お杯」と言い習わすのも、神聖な水が、野原を潤すさまに、春日の神様のお慈悲がくまなく行き渡る事のありがたさを重ね合わせた信仰の心によるものでしょう。

### ● 1000頭の芝刈り機? ●

奈良公園周辺には約1000頭の鹿が生息していますが、鹿が芝を食べ、鹿の出す糞が栄養となり、芝が育つ上、背の高い草も食べてくれるので、日光もよくあたって更に成育するのです。この芝地は、鹿を養い、鹿が芝地を養っているわけです。

## ■ 春日大社表参道バス停



参道全部を歩くのがちょっと…。という方は、飛火野の景観が広がるバス停からでも歩いてみてはいかがでしょうか。

## ■ お杯の清流・雪消の沢・野守の鏡



↑ 雪消の沢

飛火野の小高い中央部を流れる水流は、春日山に発する神聖な水谷川の水を分水したもので、興福寺境内へ流れ込んでいます。浸出する水分が、飛火野全体を潤し、雪消の沢のような湿地を作りだしています。湿地は飛火野の南、鷺原にもあって、こちらが雪消の沢であったという説もあります。

お能の曲名にもなった「野守の鏡」もこの付近に出来た丸い池であったのだろうと考えられています。

## ■ 飛火野の大楠



明治41年の陸軍大演習後、飛火野で催された饗宴の際の明治天皇の玉座の跡に、記念植樹されたものです。実際は3本が寄り添って立ちますが、遠くからは一本の大木に見えます。明るい飛火野を象徴する威風堂々とした木です。

※参道の両脇は、樹木の育成のため立入を制限しています。飛火野への立ち入りは、表参道バス停付近か、柵のない道からお入りください。

### ■大仏殿前交差点からの春日遊歩道

東大寺大仏殿にお参りになった方は、交差点から荷茶屋・神苑前に抜ける小道をお通りください。周囲は森の育成中で、桜や紅葉、椿など四季を楽しんでいただける木々を植え、万葉の歌碑などもある小道です。

### ■馬止橋・内侍道



萬葉植物園・荷茶屋の前、水谷川が飛火野へ分水される流れにかかるのが、馬止橋。馬場の終点の橋です。

表参道が参道はあたりで大きく南に曲がりますが、よく見ると萬葉植物園入口の右手に、真っすぐに延びる細い道が見えます。この道は、春日祭に宮中から派遣される女性、内侍が通った道で、内侍道と呼ばれています。男性の使いである春日祭勅使以下は表参道を用いました。



### ■宝物殿への道、奈良公園最大のケヤキ・春日山大杉切株・影向の松の幹



宝物殿に向かって斜めに延びる石畳の左手に大きなケヤキがそびえています。

幹周りは4.9mほどですが、根元ははるかに太く、奈良公園内で最大のケヤキです。老木で上部は失われていますが、緑の苔に覆われ四方に根を張った姿は、堂々として樹勢はまだまだ盛んです。

宝物殿のピロティーには、重要文化財の灯笼と並んで、先代の影向の松の幹(樹齢250年)と直径3m、樹齢1000年の大杉の切り株を見ることが出来ます。春日奥山の名木として知られていましたが、火事のため伐採されました。

二之鳥居をくぐれば、いよいよ神域の感が強くなります。

## 2 二之鳥居 から 南門



- 1 車舎・祓戸神社・二之鳥居
- 2 祓戸神社の大イチョウ
- 3 藤の絡む脇道 剣先道  
藤鳥居を通して慶賀門へ
- 4 森を縫う衾宜道
- 5 着到殿から南門
- 6 青龍滝と白藤滝
- 7 南門の枝垂桜

### ■車舎・祓戸神社(はらえどじんじゃ)・二之鳥居

貴族たちは、車舎に牛車や馬を繋ぎ、祓戸神社で身を清めてから二之鳥居をくぐりました。今も祓戸神社には、祓串が置かれていますし、横には鹿の手水所があります。



### ■祓戸神社の大イチョウ



イチョウは社寺境内に多い木、奈良公園に巨木が点在します。このイチョウは、祓戸社のたたずまいとマッチして、特に黄葉の秋には美しい景観となります。

### ■藤の絡む脇道 剣先道(藤鳥居を通して慶賀門へ)

祓戸神社から斜めに分かれる道が剣先道で、分かれ道には扇形に敷石があり、要の部分の石をよく見ると剣形になっているのでこの名があるとされます。昔から先端の石は踏んではならないと巷間伝えられ



ています。

春日祭のときは、藤原姓の人はこの道を通り、藤鳥居をくぐって本殿へ進みました。この名前も、藤原氏ゆかりの藤の花がかかる鳥居だったからでしょう。

現在でも藤の老木の多いところ。鳥居を抜けた左手石灯籠の後ろにとぐろを巻く太い藤の根が見えます。蔓は道の上空を横切って向かいの杉に絡みついています。花の季節には遠く離れたところからも白い藤がご覧いただける本殿への近道でもあります。

### ■森を縫う祢宜道(ねぎみち)



① 下の祢宜道

二之鳥居から南門までの右側の森には、春日社の神官が住んでいた高畑方面に通じる道が通っていて、上から、上の祢宜道、中の祢宜道、下の祢宜道と呼び、特に下の祢宜道は、ささやきの小道の通称で親しまれています。どの道も馬酔木(アセビ)が多く茂り、イチイガシなどの巨樹も点在する静かな道です。森を通して、若宮神社、奥の院方面へ行くことも出来ます。

### ■奈良市指定文化財イチイガシ巨樹群



春日大社が創始された8世紀頃には、御蓋山(みかさやま)の麓から飛火野にかけてイチイガシを優先種とする照葉樹林が広がっていたと考えられています。

現在も境内にはあちこちに巨樹がたくさん生育していて、幹周り3mを越える23本が奈良市の指定文化財に指定されました。上中下の祢宜道にもその巨樹が点在しています。その中の1本で、災害にあっても倒れたにも関わらず、横たわったまま、その幹が龍の横たわる様の姿でそびえ立つ、特にめずらしい形態の「臥竜のイチイガシ」が、萬葉植物園内でご覧いただけます。

### ■着到殿から南門



着到殿のあたりから参道は勾配を増して、石段となります。石段を上がると正面は御蓋山の森となります。左手が、御本殿の正面玄関である南門です。

この辺りは、古い石灯籠も密集して、春日社に対し古くから多くの人々が、信仰を寄せてきたことを実感される所です。



### ■青龍の滝と白藤の滝



① 白藤の滝

神道では身を清めるためにも、神様のお供えを作るためにも清浄な水が欠かせません。水谷川の水を引いて廻廊内をくぐらせた水は、廻廊の一郭にある榎本神社の下から流れ落ちます。これを青龍の滝と呼んでいます。明治8年、水が参道の下を横切り、南の岸を流れ落ちるようにし、白藤の滝ができました。一時は水が流れなくなりましたが、近年、元の姿に復されました。

### ■南門の枝垂桜



南門から若宮神社までは御間型灯笼(おあいがたとうろう)が並びます。

### 3 南門から 若宮神社へ



- 1 御間道
  - 2 天然記念物竹柏の純林
  - 3 若宮の大橋
  - 4 若宮椿(若宮神社)
- 若宮神社のハツ房藤
- 若宮紅梅

#### ■ 御間道



御本社と若宮社との道を尊んで御間道(おあいみち)と呼んでいます。850年以上も神官や崇敬者が往復した道で、本社と若宮の間を百度千度万度と往還する祈禱も盛んでした。

この道沿いには、古い石灯笼が立ち並びます。康暦2年(1380年)の灯笼を始め室町時代から江戸初期の灯笼が多く、古くから信仰の道であったことを物語っています。

東側は、御蓋山の神聖な森で、道の中ほどに、御蓋山山頂の本宮神社の遥拝所のしるしとして小さな鳥居が立っています。真昼にも濃い影が落ち、石灯笼と共に森厳な景観を形作っています。

#### ■ 天然記念物竹柏(なぎ)の純林



灯笼籠の奥の森には、殆どが竹柏(なぎ)の木だけという純林が多く見られ、極めて稀であるとして大正12年に天然記念物に指定されました。御間道の中程には、その特色が分かる場所として、天然記念物ナギ樹林の立て札が立っています。

竹柏は暖かいところに自生する木ですから、春日大社にあるものは、古くに献木されたものが、鹿も食べないところから繁茂して樹林を形成したのだと考えられています。

鎌倉時代には、すでに繁茂していたことが記録から類推され、実際樹齢が850年と考えられる木も確認されています。春日社では古くから榎の代わりに神事に用いられた神聖な木でもあります。

### ■ 若宮の大楠



幹周が約11.5mあって、奈良県下で1、2を争う巨樹です。江戸時代の半ばに大雪のため上部が折れたことが知られ、今のような樹形になったと考えられています。かなりの老木でもあり、千歳楠という別名もあって、その堂々とした姿は、御間道の景観に更に深みを与えています。

### ■ 若宮椿

おしべが花弁化した八重咲きの花で、花の色は真紅です。花弁の形や配列が一定にならないのが返って魅力的な姿で、愛好家の間で若宮椿と呼ばれ親しまれています。3月から5月初旬までの比較的最長い間花が楽しめます。

また椿の木の上にはモッコクの大木がそびえ、若宮大楠と向かい合って夏でも涼しい木陰を作っています。

### ■ 若宮神社のハツ房の藤



若宮社本殿北側の竹柏に巻きつく藤で、屋根を覆うように花をつけます。ハツ藤とも称される濃い紫の八重咲きの藤で、花の時期も通常の藤より1週間から10日ほど遅く、例年は5月初旬から半ば頃です。

文明元年(1469年)にこの地に2本の藤が一夜のうちに生えるという稀代の吉事があったという記録『大乘院寺社雑事記』があるほか、江戸時代の中頃には、すでに八重の藤がこの位置にあったことが『春日大宮若宮祭礼図』から確かめられます。

### ■ 若宮紅梅

天正9年(1581年)に米谷宗慶という人が、長谷寺の「人はいさ」の梅として知られる紅梅を接ぎ木して、若宮社前に献木したことが記録『多門院日記』から分かっています。

戦後の台風で倒れましたが、根元から生えた萌芽が成長し、今も美しい花をつけます。

現在長谷寺にこれにあたる梅はありませんが、この名は紀貫之が長谷寺参詣の折に読んだ「人はいさ心も知らず ふるさとは 花ぞ昔の 香に匂ひける」に由来するものです。

緑がいっぱいの上の祢宜道をゆったりと散歩してみませんか。

## 4 若宮神社から丹阪方面へ（上の祢宜道）



若宮神社本殿から大国社の横を抜けて進むと金龍神社の所で、道は二つに分かれます。

### ■上の祢宜道



金龍神社を過ぎて右手の道をとると、新薬師寺方面に抜ける道が森の中を通っています。春日大社の敷地の新薬師寺のある高畑町付近は、昔から春日社の神官が住居を構えた所、参道から南へ向かって数本の道が森を縫っています。

その中でも一番高いところを通る道なので、上の祢宜道と称されています。古くから信仰の盛んな夫婦大国社や金龍神社などを経て進む信仰の道で、最も往来の多かった道ですが、いまは静寂の楽しめる道です。

■奈良市指定文化財イチイガシ巨樹群

